



## ごあいさつ

「然らば皆さん」。その一言を残して、彼は発ちました。包囲された熊本城の窮状を伝える密使として・・・

谷村計介（たにむら けいすけ）。

勇敢と機略を称されながらも、謙虚にして寡黙であったという計介。命がけの任務に発つに際しての、その朴訥な一言は、彼の人柄を良く表していると言えるでしょう。

本展示は、陸軍伍長 谷村計介の密使としての活躍にスポットを当てます。一人の下士官が果たした特異な出来事ではありますが、これを通して、田原坂の戦いに至る西南戦争初期の状況を明らかにしたいと思います。

また、死後、彼が軍人の鑑として顕彰された、そのあり方を通して、西南戦争がどのように捉えられてきたかを紹介したいと思います。

展示のなかで具体的に紹介しますが、密使としての任務遂行には大変な辛苦があり、その後、彼は壮絶な戦死を遂げました。また、兄は薩摩軍に参加して兄弟が敵味方に分かれ、その兄も戦死しました・・・戦争は惨く、また悲しいものです。

本展示が、皆様にとって西南戦争についての理解を深める一助となれば、そして平和の大切さを思い直す機会となれば幸いです。



谷村計介

嘉永6年（1853）1歳

2月13日 誕生。幼名諸次郎。

日向国諸県郡倉岡郷（現宮崎県宮崎市）の代々の鹿児島藩郷士 坂元利右衛門、妻ウメの次男として生まれる。父利右衛門は、噺（あっけ）＝郷長を勤めた才覚人。生後3ヶ月で母ウメ死去（5月18日）。8歳上の姉ワサが貰い乳をして歩いた。

安政3年（1856）4歳

谷村家の養子となる。

谷村家は一族の倉岡郷士。文政4年（1821）に絶家していたが、計介をもって再興。その後も父のもとで暮らす。

安政5年（1858）6歳～

学問は同郷の医師、陶山謙斎・加藤担斎に師事。剣術は石川与左衛門・田中六郎左衛門に就いて示現流を、他、槍・弓・馬術を学ぶ。

慶応3年（1867）15歳

元服。名を計介とする。

藩の文武奨励に伴う地頭の検閲に際し、郷の代表8人に選ばれ、素読（書籍の音読）を披露した。

明治2年（1869）17歳

鹿児島の園田塾への入門失敗。

姉婿の加藤利易とともに立志して郷里を出るも、番所抜けの罪で捕らえられ郷里に送還、謹慎処分を受ける。

明治3年（1870）18歳

鹿児島の園田塾・今藤塾で学僕として学ぶ。

明治4年（1871）19歳

従姉妹のトヨ（17歳）と結婚。

後に一女をもうけるが、生後42日にして顔も見ぬまま夭折。

明治5年（1872）19歳

2月7日 陸軍に志願入隊。

当初は鎮西鎮台鹿児島分営三番小隊、7月に熊本の第十二大隊六番小隊に転営。

### 明治6年（1873）21歳

- 4月 対馬の守備に派遣。
- 6月1日 一等卒に昇進。

### 明治7年（1874）22歳

- 2月 佐賀の乱に出征。  
佐賀城防衛戦、撤退戦での渡河船の調達など、窮地の部隊を救う活躍をした。
- 6月28日 佐賀の乱の武功により陸軍伍長に昇進。
- 8月 台湾出兵に参加。  
戦闘は無く、守備・警備を担当する。

### 明治9年（1876）24歳

- 10月 鎮台参謀大迫尚敏大尉を護衛。柳川の動向偵察。  
小倉で神風連の変の報を受け、帰熊する大迫大尉を護衛。  
併せて、柳川士族に不穏の動きありとの報により偵察を命じられ、人力車夫に変装して動向を調査する。
- 11月 萩の乱に伴い、山口県下で警備担当。
- 12月4日 熊本歩兵第十三連隊第一大隊第二中隊へ転営。  
神風連の変後、低下した鎮台の士気回復のため、優秀な下士官を熊本鎮台へ異動させた。

### 明治10年（1877）25歳

- 2月22日 西南戦争熊本城防衛戦に参戦。  
計介の所属する第一大隊第二中隊は、激戦地 法華坂の守備を担当。
- 同月25日 熊本城の窮状を伝える密使を拝命。
- 同月26日 農夫姿に変装して熊本城を出発。  
出立後、本妙寺の裏山にて捕縛され、拷問を受けるも縄を切って脱走。
- 同月27日 吉次峠の間道にて薩摩軍熊本隊に捕縛される。  
一番小隊に捕らえられ、木留の本営にて食糧方として働くも、数日後に脱走。
- 3月2日 船隈（玉名市）の旅団本営へ報告。  
野津 鎮雄少将等に城中の状況と戦術計画を報告。
- 同月4日 田原坂の戦いにて戦死。  
乃木連隊（第十四連隊）に所属し旅団伝令に命ぜられるも、形勢逆転を試み敵塁に突撃。被弾して戦死。

## 壁パネル2 佐賀の乱における活躍

明治7年（1874）2月、大久保等、君側の奸を一掃して新政府を組織し、征韓を実行するとして、江藤新平・島義勇率いる佐賀県士族が蜂起した。佐賀の乱である。

熊本鎮台は乱の鎮圧にあたり、第十一大隊（計介は左半隊に所属）を派遣する。

計介は、一兵卒ながら勇敢かつ知略をもって味方の窮地を救う武功を上げ、戦後、伍長に昇進するのである。

2月15日、左半隊は海路佐賀に向かい、佐賀城本丸（県庁）に入るが、翌16日、佐賀士族軍に包囲される。計介は守城に奮戦。棒火矢の攻撃に際しては、数名の兵卒とともに屋根に上り、銃弾のなか防火にあたった。

2月18日、食糧・弾薬の欠乏から、左半隊は佐賀城から出て久留米府中の右大隊と合流し再起を図ろうとするが、この退却戦は政府軍に多くの死傷者をもたらした。

殿（しんがり）の安田大尉の小隊に属した計介は、佐賀士族軍が迫るなか、自ら具申し、危険を省みず、単身、筑後川住吉の渡場において舟を調達して自軍を渡河させ、追撃を逃れるという抜群の働きをみせたのである。



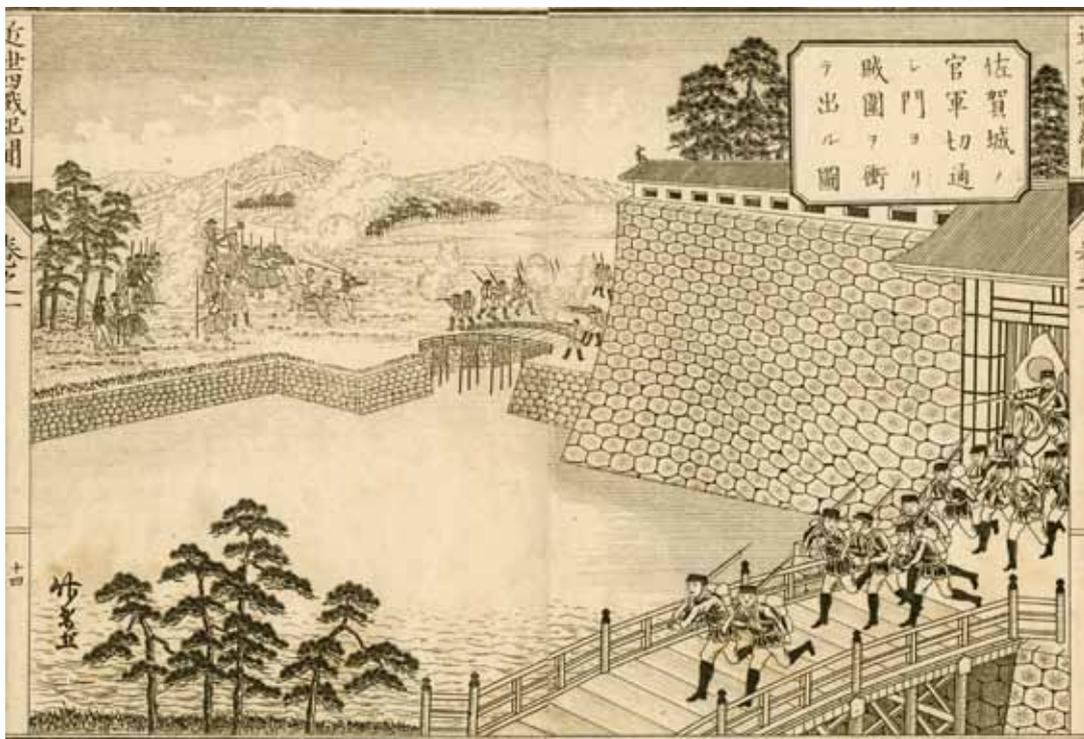
佐賀城天守石垣と鯨の門

## 展示ケース1 佐賀の乱

### ▶東京日日新聞「江藤新平の逮捕」(錦絵)

明治7年。蕙斎芳幾画。

佐賀の乱を指揮した江藤新平は、救援要請のため高知県に潜入するも不調に終わり、次いで岩倉・大久保等に宛てた意見書をもって上京を試みたものの、途上、安芸郡甲の浦にて捕縛される。本錦絵は、意見書をしたためているところに縛吏が近づいている(右上の足)という緊迫した様を描いている。



### ▲「佐賀城ノ官軍切通シ門ヨリ賊団ヲ衝テ出ル図」(銅版摺り)

『近世四戦紀聞 一』(明治11年刊行)の挿絵。

2月18日、食糧・弾薬の欠乏から、政府軍左半隊は久留米府中の右半隊と合流すべく、包囲された佐賀城を出る。現地を見ていない絵師によるものか、描写は雑であるが広い水堀に佐賀城の特徴が表現されている。

ちなみに、佐賀城に「切通シ門」という呼称は無い。本丸南東側の門のことと考えられる。



### ▲「佐賀の乱における熊本鎮台兵のルート」

『贈従五位谷村計介伝』（大正 14 年刊）掲載図をもとに作成。

熊本鎮台は、佐賀の乱鎮圧にあたり第十一大隊 648 名を派遣する。

計介は左半隊に所属し、2月18日の退却時、筑後川住吉の渡場において舟を調達して自軍を渡河させ、敵の追撃を逃れるという働きをみせた。



### ▲ 佐賀の乱の政府軍墓

左：乾亨院（籠城戦のあった佐賀城の南東）

右：山川招魂社（左右半隊が集結した久留米市の霊山 高良山麓）

陸軍墓の形状規定から外れた大形の墓石に複数名を刻む合祀墓で、石灰岩製である。

ともに基礎に「白川縣 第二大區九少區 宮内村 鑄石師 久吉静衛」

の記銘がある。宮内村は現在の熊本市中央区島崎にあたる。

熊本鎮台が、地元の島崎石工に発注して八代の石灰岩（白島石）を用いて製作した可能性が高い。

## 壁パネル3 密使指名

熊本城（熊本鎮台）に設置した電信分局は2月21日に断線し、籠城軍と征討軍との電信は途絶した。そのため、計介等密使が決死の覚悟をもって連絡を担うことになる。

密使となったのは計介だけではない。2月24日、鎮台会計部 穴戸正輝等が派遣された。

その動向が分からないなか、計介はこれに次ぐ密使に指名された。『佐賀征討戦記』（明治8年、陸軍参謀局刊）において軍功を称され、その寡黙な人柄と勤務態度から、下士官ながら人望を集めていた彼に、将校達は白羽の矢を立てたのである。

宇土櫓（鎮台仮本営）において谷干城司令長官から直々に密使を拝命した計介。

全身に鍋炭を塗り、股引・襦袢に縄の帯を絞め、農夫に変装し、26日午前1時頃、「然らば皆さん」との一言の挨拶を残し、城を出て行く。※炭を塗ったのは、軍帽の眼底の下や軍服の襟から下の肌の色を隠すためでもあった。

### 熊本城の密使たち

出発日	氏名	役職等	動向
2月24日	穴戸 正輝	熊本鎮台会計部囚獄課監獄	3/3 南関本営に達し、帰城。
2月24日	布田 直記	熊本県官吏	穴戸に随行。殺害。
2月24日	古藤 秀雄	熊本県官吏	穴戸に随行。殺害。
2月24日	青山 輝正	熊本県官吏	久留米に派遣。2/26 殺害。
2月26日	谷村 計介	熊本鎮台第13連隊伍長	高瀬に派遣。3/4 田原坂で戦死。
3月20日	中村 匡行	巡查	果たせず帰城。
3月21日	古城 貞	熊本県官吏	南関に派遣。
3月26日	坂田 吉郎	熊本県官吏（仕丁）	高瀬に派遣。4/8 殺害？
3月28日	福田 丈平	？	植木の旅団より密使。
4月4日	熊野 五蔵	県庁雇い	高瀬に派遣。4/8 殺害？



◀谷村計介の図（掛け軸）

松田蘇雪作。熊本城を背後に、変装して発った計介の姿を描く。蘇雪は明治・大正期に地元熊本で作品を発表し、美術教育にも貢献した矢野派絵師。

慶応元年（1865）～没年不詳。

1 回目の捕縛：2 月 26 日午前 1 時頃、熊本城北西の漆畑から発った計介は、薩摩軍の包囲が手薄な場所を選びながら本妙寺裏山にたどり着くが・・・

そこで、数名の薩摩軍兵に発見、捕縛される。棒で叩かれ、拷問を受けるが「近在の百姓」と言い通した。そのうち薩摩兵が居眠りを始めたため、爪で縄を擦り切って静かに立ち去った。

2 回目の捕縛：2 月 27 日午前深夜、近在の農夫の案内で間道を目指していたところ、吉次峠において熊本隊一番小隊の若い巡邏 2 名に捕縛される。

計介「小倉の豆腐屋の息子で、鎮台兵であるが戦争が恐ろしく、抜け出してきた。」

「城兵の士気は低く、食糧・弾薬は不足している。」

隊長 佐々友房等「戦闘が収まるまで安全なところに置いてやろう。」

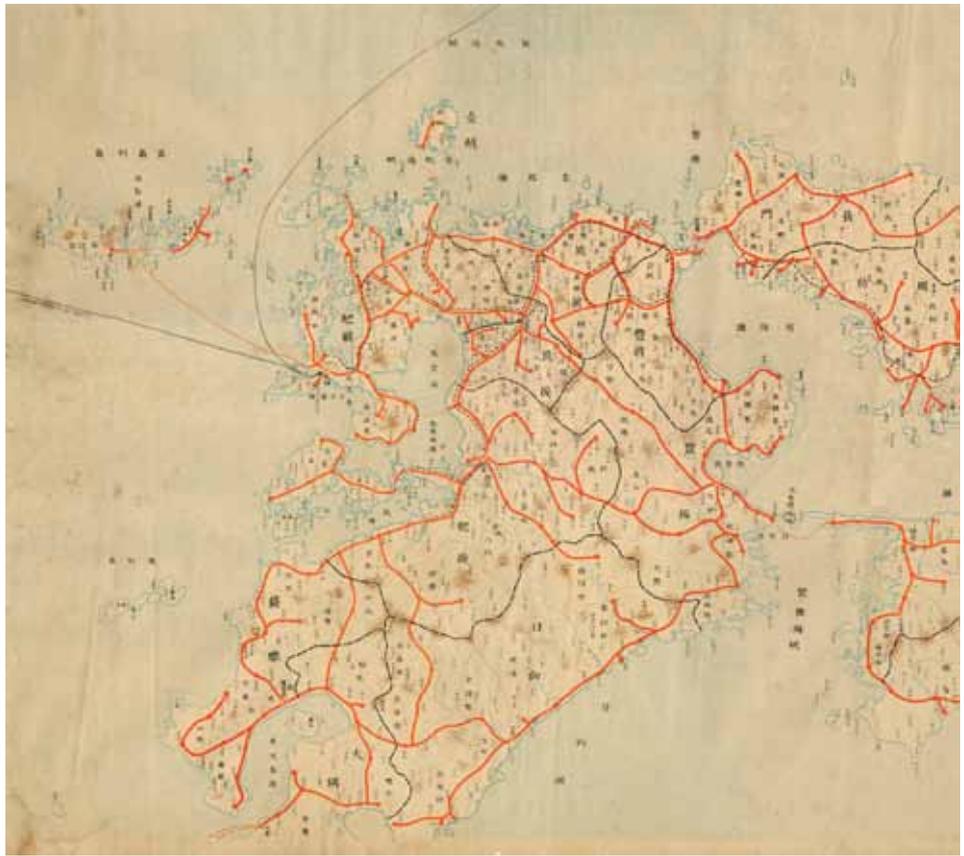
佐々等は騙され、温情措置をとる。計介は、木留の熊本隊本営において食糧係として働きながら、数日後、隙をみて脱走するのである。

※「小倉の豆腐屋」としたのは、以前、第十四連隊に所属し、小倉の事情に詳しくなかったからと考えられる。



戦争直後の吉次峠（古写真）  
道の脇に薩摩軍の仮兵舎が並び。

## 展示ケース2 密使計介



▲ 日本帝国電信線路図（九州）

明治34年（1901）における九州の電信線路図。

熊本では明治8年（1875）、熊本城内に電信分局が設置され、電信が開通する。以後、明治時代を通して電信網が整備され、明治34年に開通する市内電話の基盤ともなった。

熊本城総攻撃前日の2月21日、何者かによって断線し、籠城軍と征討軍との電信は途絶する。そのため、計介等密使が決死の覚悟をもって連絡を担うこととなった。



▲ 二本木付近の通信所の古写真

仮詰所とみられる藁葺き小屋が並び、機器は屋外で操作している。背後の山の稜線は、花岡山・万日山である。

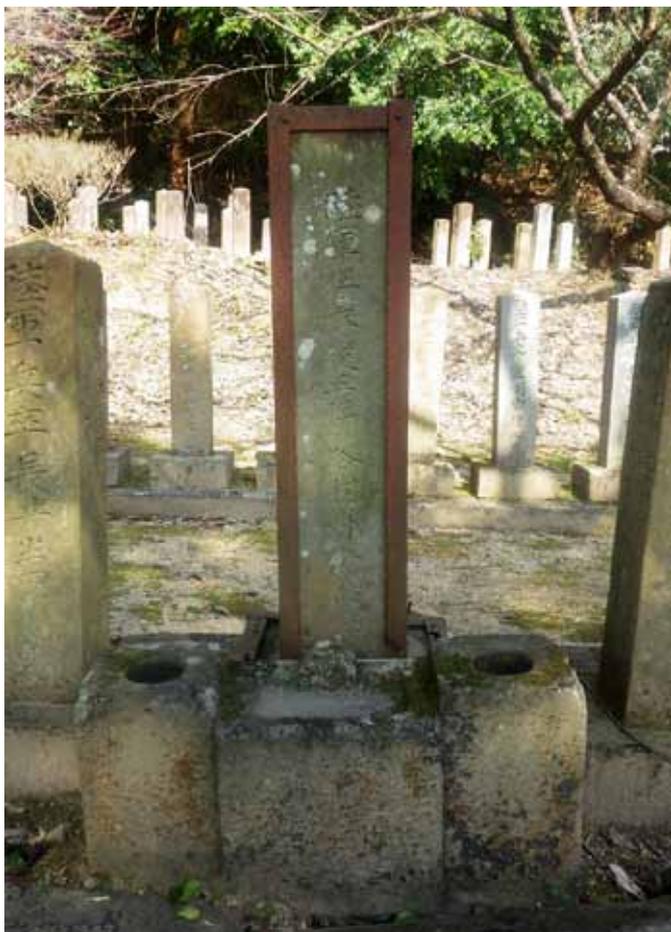
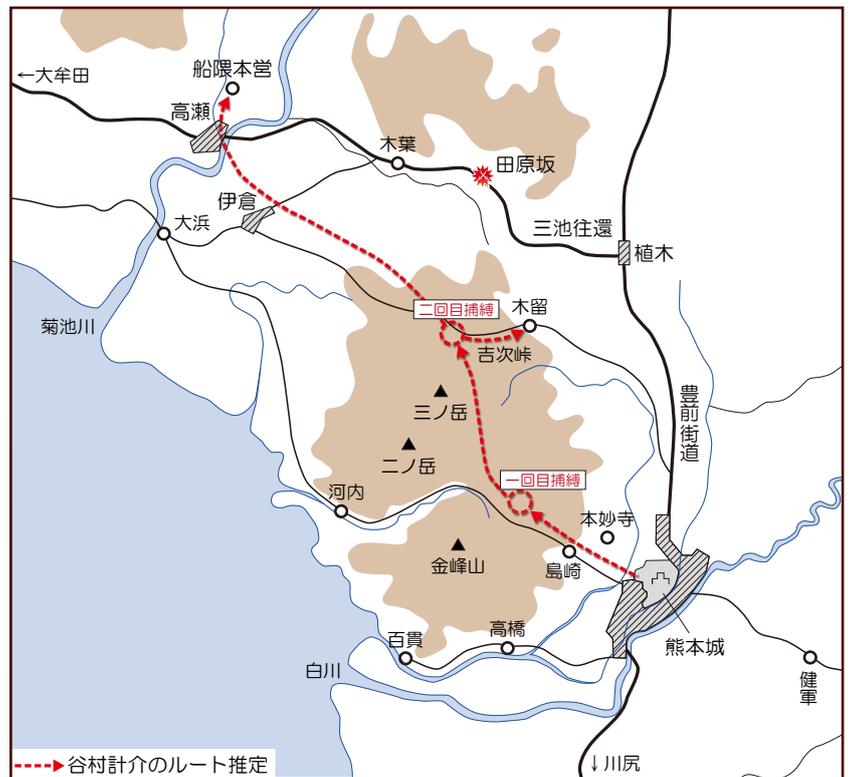


▲ 田原坂の戦い直後の古写真

三の坂から二の坂を見る。主要道であった田原坂には電柱・電線が架設されていた。手前側の松は戦闘により被弾し、損傷が著しい。

## ▶ 谷村計介 密使想定ルート

『贈従五位谷村計介伝』(大正 14 年刊)  
掲載図をもとに作成。



## ▲ 谷村計介墓 (宇蘇浦官軍墓地)

参拝者が計介の武功にあやかろうと打ち欠いて破片を持ち帰り、形状を留めなくなったため、大正 4 年 (1915)、陸軍省が新造し、鉄枠で角を覆って打ち欠けないようにした。現在の墓石は、大正 13 年 (1924) 以降のもの (3 代目) である。

## ▼ 谷村計介墓 (宮崎市倉岡地区)

明治 11 年 (1878)、父利右衛門が郷里倉岡に遺髪を埋葬した墓を建てた。現在の墓は昭和 14 年 (1939)、県史跡 谷村計介旧宅跡に移されたものである。



3月2日午後、高瀬の前哨線に到着。風体から薩摩軍の間諜と疑われ、縛られて船隈の本営（荒木甚吾宅）に連行される。

本営において、佐賀の乱の際に謁したことのある第一旅団長 野津鎮雄に面会すると、計介は涙を流したという。感激、そして密使の労苦を思い馳せたのであろう。

- 1 城中の食糧は、まだ数十日分ある。
- 2 銃砲・弾薬は余裕があり、欠乏していない。
- 3 谷司令長官は無事。樺山・与倉両中佐は負傷したものの軽傷。  
※実際には与倉は死亡、樺山は重傷で療養中であった。
- 4 城兵の士気は高い。
- 5 征討旅団が近づけば、直ちに城中から出撃する準備をしている。

以上を報告し、熊本城へ帰っての復命を希望したが、野津は計介を慰労するとともに旅団に留まるよう指示した。

3月4日、田原坂の戦い初日。地の利を得た薩摩軍の銃撃と抜刀攻撃に対し、政府軍は多くの将兵が死傷する。

計介は強く希望し、第十四連隊の田原坂攻撃に加わる。苦戦が続くなか、彼は任じられた伝令という使命を省みず、負傷兵の銃をとって単身、敵壘に突撃。たちまち数弾を受けて斃れた。場所は二の坂と伝わる。



現在の二ノ坂



第一旅団長 野津鎮雄少将



参謀長 岡本兵四郎中佐

▲「谷村計介使命を果す之図」(石版摺り画)

聴 泉巖作。新聞の付録として配布されたという。

第一旅団長 野津鎮雄・参謀長 岡本兵四郎の顔・服装は忠実に描かれ、計介(薩摩軍の間諜との疑いから腰縄をかけられている)は、掌を前に向け、踵を着け、つま先を開いて直立するという軍人の所作に則って描かれている。

左上の賛「軍人亀鑑」は、明治16年(1883)、靖国神社に建てられた軍人亀鑑碑に刻された谷干城の撰文と同じものである。

密使計介の功績とその後の壮絶な戦死は、政府軍の士気を大いに鼓舞し、戦後も彼に関わった多くの軍人から賞賛された。

一方、計介の実家は悲惨であった。

郷里倉岡は旧薩摩藩領であり西郷への崇拜熱も高かったため、郷党は皆、薩摩軍へ参戦（高岡隊）。兄 坂元祐光ほか義兄・従兄弟とも敵味方となり、彼ら3名いずれも戦死した。

妻トヨは「敵軍の妻」と阻害され、計介の葬儀もいたって質素であったという。

それだけではない。明治13年（1880）、計介の戦死賜金受領のため鹿児島県庁に赴いた父 坂元利右衛門は、途上、何者かに銃殺されるのである。

そうしたなか、明治16年（1883）、谷 干城はじめ熊本籠城会の発議・周旋により、靖国神社に「軍人亀鑑」碑が造立され、併せて360円の公債が遺族に贈られた。

しかし、事態は好転しなかった。

明治24年（1891）、姉ワサが伺候した折、谷は計介を称えるとともに「今から世間に名が出るから」と言って彼女を慰めている。

彼の功績は、関係者の他には未だ知られていなかったのである。



谷 干城

## 展示ケース3 顕彰の契機

### ▶「軍人亀鑑碑」

明治16年（1883）、靖国神社に造立され、近くの九段会館（建設工事により一時的に撤去）に移設されている。

熊本籠城会（西南戦争時の籠城軍の親睦会）が発議・周旋し、宮内省からの下賜金50円に加え、全国の陸軍人からの寄付金により制作した。

題字「軍人亀鑑」は征討総督であった有栖川宮親王の揮毫、碑文は熊本鎮台長官であった谷干城の撰によるものである。

なお、一下士官の顕彰碑を靖国神社に建てることには異論もあったが、計介の功績が抜群で軍人の鑑であるとして許可されたという経緯がある。



谷村計介の歌

作詞・作曲 小学唱歌教育研究会

一、熊本城は 籠軍の  
陣を受けぬ 十五二十重  
この陣を 本營に  
伝ふる人は あらざるか

二、 伍長谷村 計介は  
谷村軍の 勇を受け  
屹度覚悟の 胸をすえ  
ひそかに城を ぬけ出しぬ

三、 偶々陣に 捕らえられ  
難しき責に あいたれど  
守りの兵の 網をかすめ  
難引さちぎり 逃れたり

四、 再び捕らえ られたるも  
計介わざと 泣き鳴び  
籠城ものと みせかけて  
人夫の中に 使われぬ

五、 又も巧みに 逃れ出て  
高嶺といえる 所なる  
第一陣団に 逢し得て  
大事の便を 果しけり

六、この時、計介 うれしさに  
言葉も急に 出し得ぬを  
旅団長をば 初とし  
感ぜぬ者は なかりけり

谷村計介の歌

くまもと じゅうご は ぞくぐん の  
かこみ を うけぬ とへは たへ  
このおし りをき ほんとい に  
つた あら ひと は あら ざる か

### ▲ 尋常小学校3年生唱歌 「谷村計介」

明治38年（1905）、田村虎蔵作曲、石原和三郎作詞。

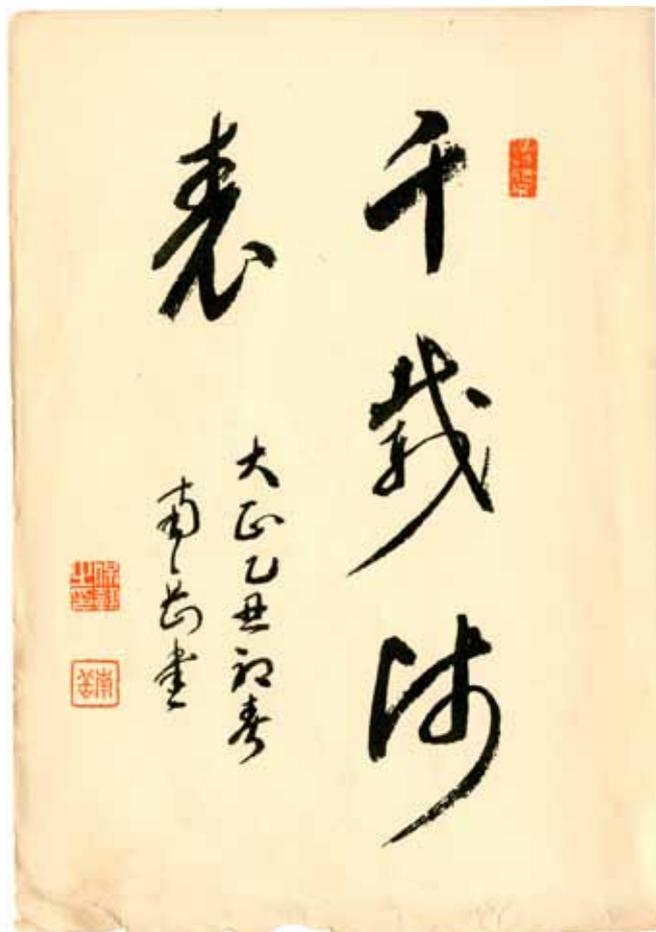
このコンビは「金太郎」・「浦島太郎」などの童謡・唱歌を手がけた。

▼『児童用 尋常小学校修身書 巻三』  
大正8年（1919）9月、文部省発行。  
株式会社国定教科書共同販売所印刷。  
「ちゅうくんあいこく」の題で計介が紹介されている。

第二 ちゅうくんあいこく

めいお十年に熊本のしるがぞくぐんにかこ  
まれましたしるをまもつてゐた谷少将は、し  
ろの中のやうすを、えんぼう  
のくわんぐんに知らせよう  
と思ひ、そのつかひを伍長谷  
村計介にいひつけました。

計介はからだに  
すゝをぬり、やぶ  
れたきものをきて、や  
みにまぎれてしるを  
出ました。とちゆうで  
二度もぞくぐんにとらへられ、いろくのな  
んきな目にあひましたが、とうくくわんぐ  
んの司令部について、しゆびよくつかひのや  
くめをしとげました。

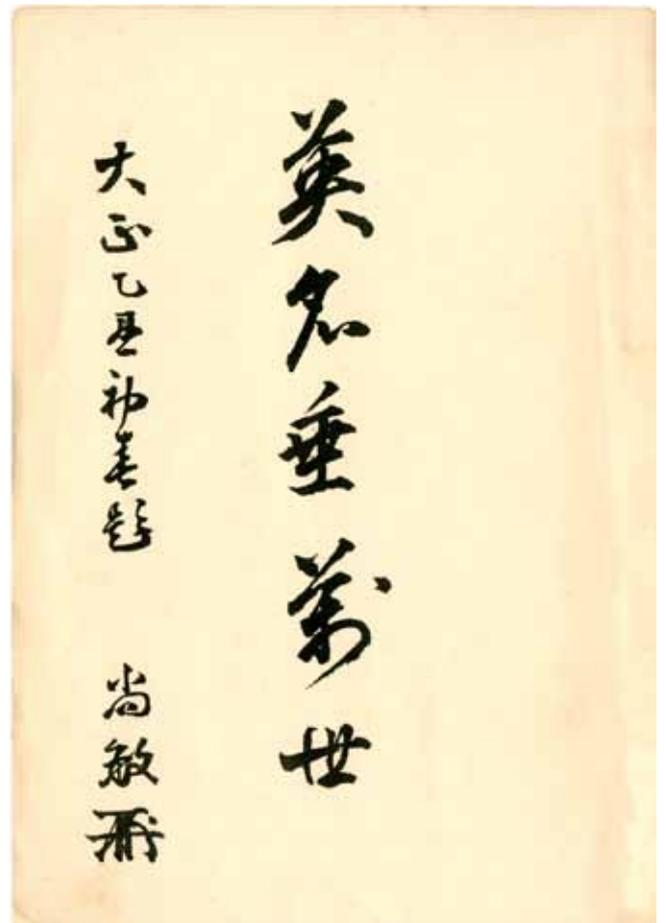


### ◀奥 保鞏書「千載儀長」

大正 14 年（1925）、「贈従五位谷村計介君銅像建設会」により刊行された『贈従五位谷村計介伝』巻頭に掲載された元帥陸軍大将 奥 保鞏の筆跡。

「千載儀長（千年の手本）」として計介の功を称えている。

奥は、熊本鎮台士官として佐賀の乱、西南戦争（籠城戦）に参加し、計介を良く知る人物であり、本書作成に際しても校閲の責をとった。



### ▲大迫尚敏書「英名垂萬世」

同じく『贈従五位谷村計介伝』巻頭に掲載された元陸軍大将 大迫尚敏の書跡。

大迫は陸軍大尉（戦中に少佐に昇進）として熊本城籠城戦に参加した。

明治 9 年（1876）の神風連の変では、出張先の小倉から帰熊する際、計介の護衛をうけており、縁浅からぬ仲であった。



### ▲倉岡の「忠烈碑」(現在)

地元倉岡の住民が金 1 千 5 百円を調達し、造立した。

石材は、計介にとって縁の深い熊本城の石垣の石を用いている。

明治 38 年（1905）、尋常小学校唱歌「谷村計介」が作られ、大正 8 年（1919）には修身教科書に密使としての働きが紹介される。これらは、日露戦争（1904～05 年）、第一次世界大戦（1914～18 年）と時期が符合しており、戦意高揚のためのプロパガンダとして計介の活躍が教育の場に取り入れられたものと考えられる。

大正 13 年（1924）には、裕仁親王（後の昭和天皇）のご成婚に際し、国家の功労者に対して贈位があり、従五位が追贈される。これを機に、地元倉岡において、郷土の誇りとして顕彰碑・銅像が建てられ、後、計介は軍人の鑑として広く顕彰されていく。

太平洋戦争時の金属供出による撤去後、平成 10 年（1998）に改めて熊本城小天守内に設置された彼の銅像は、熊本地震による石垣倒壊にも関わらず無事であった。

#### 銅像

大正 15 年（1926）	宮崎神社	胸像	従五位追贈に伴う，昭和 18 年金属供出
昭和 2 年（1927）	熊本城行幸坂際	全身	西南戦争 50 年事業，昭和 18 年金属供出
昭和 8 年（1933）	宮崎市倉岡地区	胸像	生家跡県史跡指定に伴う，金属供出
昭和 53 年（1978）	宮崎市倉岡地区	胸像	西南戦争 100 年に伴う
平成 10 年（1998）	熊本城小天守	全身	熊本中央ライオンズクラブ 35 周年事業

#### 顕彰碑

明治 16 年（1883）	軍人亀鑑碑	靖国神社（現九段会館）
大正 14 年（1925）	忠烈碑	宮崎市倉岡地区
大正 15 年（1926）	忠烈碑	熊本城行幸橋付近
昭和 3 年（1928）	伍長谷村計介戦死之地碑	植木町豊岡（二の坂）
昭和 8 年（1933）	贈従五位陸軍伍長谷村計介誕生之地碑	宮崎市倉岡地区
昭和 12 年（1937）	西南の役六十年記念碑	熊本城行幸橋付近
昭和 15 年（1940）	谷村計介碑	吉次公園（吉次峠）

## 展示ケース4 軍人の鑑へ



▲田原坂脇の「伍長谷村計介戦死之地碑」  
昭和3年(1928)、戦死の地田原坂二の坂脇に造立された。

主銘の揮毫は、熊本出身者で陸軍中将となった鑄方徳蔵。署名は「陸軍少将」とあるので、その在任期間、明治44年(1911)から大正5年(1916)の間に書かれたものと推定される。



▲谷村計介旧宅跡(宮崎県史跡)

昭和8年(1933)指定。建物は昭和29年(1954)の台風により倒壊した。

## ▼熊本城内の「忠烈碑」

大正15年(1926)造立。熊本城行幸橋付近にある。題字揮毫は元帥陸軍大将 奥保鞏、碑文の撰は徳富蘇峰による。



▲「贈従五位陸軍伍長谷村計介  
誕生之地碑」

昭和8年(1933)、谷村計介旧宅跡の県史跡指定に伴って造立された。



### ▲ 倉岡地区の胸像跡

昭和8年（1933）に造立されたが、金属供出により現在は台座のみが残る。



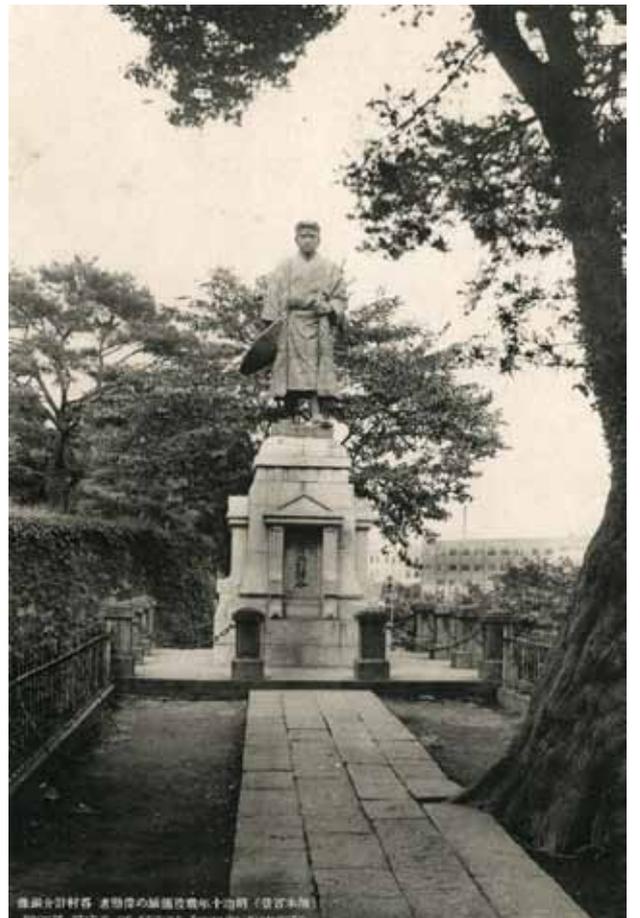
### ▲ 倉岡地区の胸像

少年時代の計介が遊び、鍛錬した倉岡城跡にある。昭和53年（1978）、西南戦争100年を機に造立された。



### ▲ 熊本城内の銅像（新）

平成10年（1998）、熊本中央ライオンズクラブ35周年事業として小天守に造立された。旧銅像とは異なって軍服姿である。写真は熊本地震直後のもの。石垣倒壊にも関わらず、彼は無事であった。



### ▲ 熊本城内の銅像（旧）

昭和2年（1927）、西南戦争50年を期し、熊本市在住の山下宇太郎が寄付金を募って、行幸坂際に造立された。写真は絵葉書の画像。昭和18年（1943）、太平洋戦争の激化に伴う金属供出の犠牲となり、その際は供出壮行会が催された。

## 実際の展示風景

※新型コロナウイルス感染症防止のため、換気・除菌等に配慮しています。  
是非、熊本市田原坂西南戦争資料館にお越しください。



▲企画展示・体験学習ホール



▲展示全景



▲壁パネル



◀ケース内の展示